

※以下は、「にしなすケアネット」事務局によるフェイスブックの記事 & 画像と、そこに参加した私が書き込んだコメントです。

にしなすケアネット

R4.11.7(月)

第36回あおぞらのいす(ひきこもり 不登校支援の会・相談会)

第1月曜日はこれ！

今回は先月文科省から公表された、令和3年度の不登校に関する調査結果をもとに話し合いました！

学校復帰をした割合が28%弱だったことから、ほとんどは学校以外の場にいる、あるいは自宅にいることが分かりました。

今後、教育委員会ともこの結果についてすり合わせを行っていこうと考えてます。

来月は12/5(月)18時半～柝の実荘です！

◇こうした資料をもとに、学校に馴染むことが難しい子どもたちが増加しているといった現象を数量的に検証したり、学校や教員たちの取り組みを批判的にとらえることも確かに意味はあります。しかしそれ以上に大切なのは、子ども一人ひとりの在り方だと私は考えています。すなわち、表面的・形式的には学校に来てはいるけれど、ひどく辛そうにしている子どもや、厳しい家庭環境の影響を受けてバランスを乱している子どもたちの「内なる想い」を深くとらえ、寄り添い続けることが必要であると私は考えているのです。

◇規律や規範、あるいは学力向上を重視し、それらを一方的に教え込むことに傾注するような教員たちも確かにいますが、子どもたち一人ひとりの想いに粘り強く、丁寧に寄り添おうとする教員たちも多くいるのです。そうした教員たちは世の批判を甘受しつつ、自分たちの取り組み内容を誇ることはせずに日々の実践活動に地道に取り組んでいます。私はそうした教員たちや学校の姿を多く知っています。学校や教員たちは、本来、信頼に足る組織体であり、人たちののです。またそうあるべき組織体であり、人たちが構成されるべきなのです。

◇大人たちもそうですが、長引くコロナ禍の中で、不安定な社会情勢や厳しい国際状況の影響を受けて落ち着かない子どもたちが多くいます。しかしそうした中であっても、困難な状況に置かれている子どもたちの最善の利益や権益を最大限に追い求め、護り抜く必要があると私は考えているのです。

◇画像には、昨夜のミーティングで配布した拙文（「福祉の思想」）も載っています。

